

## エコエティカと文明

東京大学名誉教授／哲学美学比較研究国際センター所長  
今道 友信

今道友信でございます。このような会で講演をさせていただくことを大変名誉だと思って喜んで参りました。「エコエティカと文明」が私の題でございます。お手元に一枚の紙をお配りしてございますが、これをご覧いただくときは私のほうから申しあげますので、それまでは紙の方とはとにかく無視して私の話す言葉の方に集中していただきたいと存じます。私は古い教師でございましたので、たいていのところに黒板があるものと思っていましたが、ここはモダンだから黒板はないだろう、そうすると面倒な術語は先に紙に書いてお配りしておいた方がよいと思ってお配りしましたので、最初は言葉に集中していただきたいと思います。

### 1. 序

我々は、文明の最中<sup>きなか</sup>としての現代に立っております。現代をどのように定義するか。私は、現代とは「科学技術が有効な道具としての性格を維持しながら、同時に我々の環境になっているという時代」であると言います。環境倫理学という言葉の中には、環境というと自然だけと考える人々もいますけれども、そうではなくて、我々は科学技術の環境の中に生きている、それも科学技術は道具としての性格を維持したままです。我々の環境が技術空間であるという現実を意識しなければなりません。もとよりその人工空間が自然において構築されている以上、自然の条件が基礎的な環境をなしていることは当然であります。そこで私の話す「エコエティカ」がどういう学問かということ、言葉の上で

ご説明しなければなりません。

オイコス (oikos)。これがギリシア語では、狭い意味では「家」で、広い意味では「動物の棲息圏」とか「人間の生活圏」という意味でございます。それがラテン語で縮まるときに、エコ (eco) になりました。ラテン語では意味はそのままですが、日本語でエコというときには、狭い意味での「家」という意味はございませんで、生活圏、あるいは行為・行動の圏です。ですから「エコエティカ」というのは「生圏倫理学」と訳します。これは私が学会に提出した言葉でございます。最初どうして日本人なのに日本語で言わないのかという方もおりましたが、現在の日本の文化の程度では、日本語で書いただけでは世界に発言することになりませんので、どこの国の言葉でもないラテン語の言葉で言えば、おのずから世界に広がるだろうと考えて、そうしたのです。

## 2. 行為の場としての自然空間と技術連関の差異

### 技術連関社会における「エコ」の範囲

我々は自分たちのエコというものを考えますと、自然の中において、自然の環境性を引き継いではおりますが、今や我々のエコは、単なる地球、つまりグローバルな問題ばかりではなくて、人間の生活圏、あるいは行為・行動圏を見ますと、遠くは宇宙空間に進出しております。その上、これが衛星等を整備し、これが日常生活に不可欠な天気予報、世界平和に必要な情報、あるいは地球引力の圏内においては実施不可能な未来科学の実験、つまり重力の影響のないところでしなければならない実験を可能にする宇宙空間までもエコに入っている。そればかりか、極微の世界も、人間をはじめ諸々の生物の体内のナノスペース、あるいはフェムトスペースにまで、遺伝子の操作等も、結局人間のエコの中です。こうしてエコとは人間の行為・行動圏になりますから、これは我々の倫理を考える際に考察しなければならない対象になる。ですから我々人類の行為・行動次元としてのエコとは、全地球を含み、宇宙空間に及び、極微空間に及んでいるということを意識しなければならない。

そうなりますと、当然の成り行きとして、技術連関そのものを構成する諸々の機械や、それを動かすエネルギーについても考えていかなければなりません。倫理とエネルギーは非常に大きな問題でございますが、倫理を考える人が、あるいはエネルギーを操作している人が、どのくらい両者の密接な関係を意識して問題化しているか。私たちにとっては日常のエネルギーは電気でございますので、「電気と倫理」というテーマも本当に考えなければならない課題になるでしょう。

### 技術連関社会における「移動」

さて、「移動」ということ、場所を移ることは、人間生活にとって必須のことでございます。私は東京に住んでおりますが、こちらに参りますときに、快速電車を使って参りました。方向としては私の家から東の方にあるはずなので、千葉大学と同じ方向にあるのですが、東京大学までは歩いて丸一時間かかります。その一時間よりも10分少ない時間でこちらに着きました。これは驚嘆すべきことと言わなければなりません。改めて意識しなければなりません。我々の住んでいる人工空間としての技術連関は、自然的な地理条件における距離の絶対性を、完全にモダンな機械によって相対化している。今日、航空機でパリまで11時間で行けるということが当たり前のことになっていることも、改めて意識しなければなりません。ですからもし私がヘリコプターを使うことができたなら、自宅から千葉大学までは15分くらいで着くことができたかもしれないと思います。そういうことを考えますと、我々の住んでいる世界は、不可思議な世界と言ってよろしいかと思えます。

### 科学技術と倫理

人間の移動の利便に関する限り、このような科学技術の成果は、賞賛すべき業績と言ってよいと思います。しかし、自然の条件を無視してまで人間に利便をもたらす技術の可能性が、全て一般的に肯定されてよいものかどうかは、考

えてみなければならないと思います。移動の場合は、重視される価値は全部スピードです。でも生物の成長は自然の現象で、そして本来特定の期間を必要といたします。ご承知のように、需要の多いウナギは養殖ウナギを拵えなくては間に合いません。これなら成長に何年も待つ必要はない。発育剤や栄養剤を多用して、放熱エネルギーを技術的に補給していきますと、かなり高等な生物の成長期間を短縮することができるようになってまいります。もしこれを人体に使ったらどうなるのか。ノーベル賞受賞者の多くは、インタビューで申し合わせたように、好奇心をは大事だと言いますが、好奇心を重視して是認するとはとんでもないことです。いい人のいい好奇心ならいいですけれども、世の中には非常識でかつ悪質の好奇心をもつ人が多い。例えば、この生物の異常発育を助ける生命科学の知見を応用すれば、短期間に人間を肉体的にだけ成長させて次々と戦場へ送り込むこともやがては可能でしょう。ですから、そういうことを考えてみると、科学技術の自然への介入は、是とすべきものと非とすべきものがあるはずで、すなわち人間として考えるべき倫理の問題があるのです。それはすべての人間にとって、現実の課題としてあるものと、改めて意識しなければなりません。

### 3. 知の開発と技術連関

そこで「知の開発と技術連関」ということを考えてみます。科学技術が人間の行為の射程を拡大する。その結果、自然の中に放置された自然存在としての人間が、この科学技術のおかげで、その日常生活を昔の王侯貴族の水準を遥かに超えた贅沢で健全なものにしている事実、我々はみな感謝し、それに満足していることは申すまでもありません。世界中の名物が食べられるということは、200年前の王侯貴族にはできないことでした。今日我々はいちのものを繁華街で手に入れることができます。それから、眠りながら旅行をする、バス旅行や航空機の旅行がある。駕籠<sup>かご</sup>や馬車の移動では、このスピードと安眠はありませんでした。

## 情報機器の発達とその影響：テレビジョン

では、知の開発という面ではどのようなことがあるのか。情報科学の発展による情報機器の発信や拡大は驚嘆すべきものです。申し上げるまでもないことなのですが、身边にはテレビジョンがある。これは遠くの地域で発生した重大事件が、同時に明瞭な光景とともに、しかもそれぞれの国の言葉をそえて放映されている。ですから、我々は今、遠いところの異国の民衆を、我々と同じ人類であるということを感じざるをえません。これは意識の変化ですが、わずか150～160年前の生麦事件のことを考えますと、同じ日本人の所業とは思えないでしょう。そういうふうにより意識を変化させるにあたって、テレビジョンがどんなに影響があったか。ですから、18世紀後半からの国民意識の高揚——18世紀後半に近代国家ができて、良いか悪いか分かりませんが、とにかく国民意識が強くなった——とともに、20世紀における情報機器における人類意識の普及は非常に大事です。

その一方で、時間を考えない、世代を考えない情報の平等伝播というのがテレビジョンの時代の特色です。皆さんもテレビジョンの時代に生きているわけですから、そういう光景は考えられませぬでしょうけれども、私が子どもの頃など、無残な殺人事件の現場などを知ることはなかった。第一、我々の子どもの頃は、大人が他の大人を殺すなどありえないと思っていました。その無知のおかげで子どもの頃残酷な気はおきませんでした。ですから情報機器が無制限に開放された今、世代間による情報整理を考えないと大変なことになります。そして社会が情報の平等を許しているということについては、倫理学者ばかりでなく、社会全体が考えなくてはなりません。世代による情報の差別も必要です。視聴覚を通しての印象を無制限に青少年に与えていきますと、どんなことになるかという、眼を閉じて思考するという理性的訓練の時間や読書の時間が減り、快楽や刺激へと惑わす、私利私欲の映った映像が増えていきます。ですから情報機器の効果には負の面があることも意識しておかなければなりません。正の面があることは当然ですから繰り返さないでおきます。

## 情報機器の発達とその影響：携帯電話

21世紀になって世界のいたるところで普及している情報機器は、携帯電話です。今やそれは多機能です。その機能を範疇に分けて説明すると、固定電話と同じに携帯電話は電話器であることは確かです。しかし自分の居場所を隠すこともできるし、逆に自分の居場所を知らせることもできますから、これは隠れ蓑だと言ってもよいでしょう。今までのどんな機械もできなかったことです。また携帯電話のメール機能を使えば電報よりも速く用件を伝えることができます。記録装置として写真や音を伴った動画まで撮影するような電話機もあります。携帯電話の機種によっては、ある種の切符や入場券を予約することもできますし、コンビニエンスストアなどでは財布の代わりに利用することもできます。そしてインターネットを利用すると検索もでき、またGPS機能もあります。子どもに携帯電話をもたせればどこにいるか分かるのです。

こういうことを考えて20年前と比べてみますと、1980年ごろは私も現役の大学教授で、秘書や手伝いをしてくれる大学院の学生も5、6人いましたが、今はそういう人々よりも携帯電話一つあればいいということになります。しかも小さな子どもでも使える可能性があります。そういうことを考えてみると、一般市民の日常生活の中に集約されている行動力はたいへん大きなものになっています。ですから、遭難した際の救助を依頼したり、苦境にある人をいつでも励ます可能性など、携帯電話の利点は枚挙しきれないけれども、また脅迫や誘惑にも利用されうる道具で、個人の物理的の力量は極限を見きわめ難くなっています。我々一人一人が倫理意識を持っていないとどのようなことになるのかを思いますと、どうしても倫理というものを考えていかなければならない、ということになります。

### 4. エコエティカの必要性

「倫理」は「職業領域の服務規定」ではない

そこで私は「エコエティカ」というものの必要性についてお話ししたいと思います

います。一般に倫理が必要だということはお分かりいただけたかと思います。「エコエティカ」は、先ほどご説明しました「エコ」における倫理学、新しい人間の行為・行動の圏内で妥当する倫理学ということです。環境倫理も入るでしょうし、医療の倫理も入るでしょうし、経済の倫理も入るでしょう。

今、倫理の必要性は、日本でも一般社会、それから指導者の位置にある人にも芽生えていると思います。その証拠として誰でも挙げることは、各職業領域において、倫理綱領とか倫理規定などができているということです。またそれに関する書物もたくさんあります。このように倫理意識がようやく日本でもアメリカでも目覚めてきたと言われていています。しかし、今日のいわゆる倫理綱領や倫理規定は、それぞれの職業領域の「服務規定」にすぎません。それらのどこに、何が善であるか、何が悪であるかといった、哲学的な思索の跡があるのでしょうか。そういうことを無視してどうして倫理といえるのでしょうか。服務規定もないよりはいいのですが、服務規定にすぎないものが倫理という名前で横行していることについては、国民の知識層全体が反省してみなければなりません。

特に国辱的と思われるものは、「国家公務員倫理法」です。倫理を法で規定するという考えは、日本を除いては世界中どこにもないと思います。時々ニュースなどで、大臣や教育者などで道ならぬ経済行為をした人が、「法に触れるようなことはしておりません」と胸を張って言っているのを見ますが、「法に触れない」ということは、人間として守るべき最低のことです。殺人を犯さないということは法に触れないということですが、だからといって、私が人を殺さないということ、人前で「私は法に触れる行いはしておりません」と胸を張って言うようなことでしょうか。日本人全体が言葉を乱しています。倫理法が議会を通過したというのに、事あるごとに議会に文句を言ってみるジャーナリストが誰一人としてこれを嘲うべき言葉とと思っていません。逆に褒めるのです。馬鹿だと思います。そしてそういうことに、差別語だといって馬鹿という言葉を使ってはいけないという社会も考えものです。世の中から馬鹿という言葉

消そうとしているので、私は仕方なく「ウマシカ」と言っておりますが、とにかく「私は法に触れない」と威張って言うような世界は、ウマシカの集う悪の社会でございます。

### 学問としての「倫理学」：ソクラテースの「魂の世話」

このように、倫理、倫理と気安く言っておりますが、服務規定としてのいわゆる倫理規定ということと、倫理学ということは、区別しなければなりません。英語で ethics というのは、日本では時々簡単に「倫理」と訳しますが、ethics は moral と違って「倫理学」なのです。physics が自然についての雑然とした思いなしではなくて、「物理学」という学問であるのと同じで、ethics は学問なのです。ですから、善とは何か、悪とは何か、重要な徳目とは何か、人間の行為の構造とはどういうものであるか、というようなことについて、専門的な知識は必要としませんが、ある程度の基礎的な学問的知識は必要です。

倫理学は哲学の一部です。哲学という言葉を作った人、ソクラテースは「人は皆、『魂の世話』をしなければならない」と言いました。「魂の世話」は誰にでもできる哲学だと思えます。哲学の一番下の段階です。それを聞いて人が不思議な顔を見ると、ソクラテースは、「でもあなた方は皆、肉体の世話をしている」と言うでしょう。例えば、熱が39度あったら「これは大変だ、事と次第によっては肺炎になるかもしれない」と我々は思います。脈拍はどれぐらい、血圧はどれぐらいが正常値だということを我々は知っています。体温や脈拍や血圧の正常値は何かというと、医学の学問的常識です。肉体の世話をするためには医学の常識を知らなくてはなりません。ですからそれと同じように「魂の世話」をするためには、少なくとも人間にとってどんな徳が大事なのかということを知っておかなくてはなりません。ちょうど脈拍、食欲、便通、体温、血圧というような幾つかの条件を、医学の常識として知っているように、社会的な道徳はどのようなものなのか、個人的な道徳はどのようなものなのか、その程度の知識でいいのですが、倫理学を知らなければなりません。そうでなければ

倫理学なき社会だということになります。日本は残念ですけれども、大学の倫理学の教授でさえ、基本的な枢要徳が4つあると言われているのを挙げる事ができません。そのくらい本式の勉強をしていないのです。もちろん倫理学は暗記ものではありません。しかし基本的なものは幾つか覚えておかなければなりません。

### 学問としての「倫理学」：アリストテレスの「勇氣」

アリストテレスの言う四大枢要徳の3番目に「勇氣」があります。「勇氣」とは何でしょうか。ただ暗記して3つ目が勇氣であると知っていても、「勇氣」とは何かを考えてみないと意味がありません。「勇氣」とは何かということ、たいていの人は敵に後ろを見せないことだとか、家族や民族を守るために戦うことだと言いますが、それはアリストテレスが高い勇氣として「人のために命を捨てること」と言ったからでしょう。しかしアリストテレスは、一番下の勇氣、つまり人間にとって最も身近な勇氣とは、「自分が正しいと信じていることを、ためらわずに発言すること」だと言っています。これだけは今日、心にしっかりと留めておいて下さい。勇氣というのは男だけのものではありません。女にも当然あります。

私の小学校5年生ぐらいのときから大学に入るまでの15年間、日本は戦争をしていました。第二次世界大戦を、「聖戦」すなわち「聖なる戦」と盛んに新聞は書いていましたが、それでも私の周囲には、学校の友人もクラスメートも、それを本当に信じている人は一人もいませんでした。ですが、「この戦争は負けるに決まっているし間違っているのではないか」と公に言う人は少なかつたのです。学生がそういう論説を発表すれば退学になりますし、職責のある大人が言ったら牢獄に入れられますから、誰も勇氣をもって公には言いません。言わない結果、戦争は大きな犠牲を払いながら続きました。それはドイツでもイタリアでもアメリカでもイギリスでも同じだったのでしょう。まだイギリスなどには良心的反戦論者として牢屋に入った人がいましたが、とにかく誰

も戦いで人を殺すことを是認はしていないにもかかわらず、戦争は間違いだとは言えずにいたのです。その結果をお考え下さい。そして今から申し上げることがよくお聴きになってください。

16世紀に160万人だったのが、19世紀には800万人になる、そして20世紀の終わり頃、1986年には1億800万人になった。何の数でしょうか。それは戦死者の数です (R.L.Sivard: *World Military and Social Expenditures* (1986) からの引用)。本当に勇気をもって人々が生きていたら、戦死者の数がゼロになることはないでしょうが、こんなに増えることもないでしょう。もちろん人々は言うでしょう。人口が爆発的に増えて、20世紀には50億にも60億にもなったのだから、戦争の犠牲者が増えるのは当然だと。しかし当然ではないのです。なぜかという20世紀になると人権が大事だと宣言されました。人権の基礎は人命です。また20世紀になって科学技術は長足の進歩を遂げました。そして科学技術は人間の日常生活の幸福を祈って進歩してきたはずです。それが、科学技術によって作られた爆弾などの兵器によって1億800万という人命が奪われたのです。統計者は嫌になって1986年で止めてしまいました。20世紀の終わりまで、この統計を続けることは堪え難いというのです。しかも統計上の戦死者というのは、いわゆる戦場での死者、つまり戦場で死亡した兵士のことです。靖国神社が問題になるのは当然でしょう。なぜなら戦争で死んだ人は兵士だけではないのです。未来を担うはずの幼い子供たちもいました。

ですから考えてみますと、我々の時代は、これからますます機械の力が大きくなっていくでしょう。機械を、科学技術を良い方向に使わなければ、倫理的に使わなければ、どんな危険なことになるか分かりません。そしてそれは一国家だけの、あるいは一民族だけの問題ではありません。そこで「エコエティカ」とは何かというお話をしなければなりません、「エコエティカ」は倫理が絶対に必要だということを前提とします。

## 5. エコエティカとは何か

### 「安全」と「危機管理」

この新しい学問は、1970年頃から私が提唱して、1980年頃から国際会議が毎年行われるようになりました。エコエティカにとっての課題の一つは「安全」ということです。かつて倫理学で「安全」ということが本当の意味で問題にされたことはないのです。また「危機管理」もエコエティカの課題の一つです。マネジメントの問題ではなくて倫理の問題です。そしてその課題に関連して新しい徳目がたくさん出てくるはずですよ。例えば新しい徳目の一つとして、国家の相対性をお互いに意識することが挙げられます。「人を殺してはならない」という倫理の絶対命令がありますが、戦いの場になると国家のために敵を殺せば殺すほど英雄になり、勲章や年金まで貰えます。殺人者をそのように厚遇していいのでしょうか。国家倫理という限定のある倫理ではなくて、エコ倫理学、本当に人間の生活圏、そして行動圏や行為圏における倫理が我々には必要なのです。

### 「正確性」と「好転換」

さらに、科学技術の進歩したこの新しい時代には、機械に対応する徳というものも必要です。機械に対応する徳とは「正確性」(exactitude, correctness)です。これは自然環境における「誠実性」(sincerity)と並んで大事な徳です。なぜかという、機械のどこかの点を我々の指が押し違えると、致命的な事故が起きるかもしれません。過誤ということが許される場所、それは自然です。誤りということが許されない場所は、悲しいことに、人間が作った世界、人工空間です。そして、危険な点もそうでない点も同じところに置かれているということ、こういうことも考えていかなければならないでしょう。指先の時代と言われるように、軽快な機械操作の連続する「技術連関」という環境において、誰かがどこかで一つのボタンを押し違えただけで全体の運行が阻害されるとい

うことは、大袈裟に言えば誰かが故意にそういうことをしたら、たった一人で、多くの生命を一瞬にして奪うこともできるのです。そういう緊張の世界にいと、どうしても人間は笑いを失っていきます。ですから、ゆとりをもつ場所を作らなければなりません。ゆとりをつくること、エウトラペリアということ、アリストテレースが遠い昔に言っております。これは字の通りに訳すと、「好ましき転換」という意味です。「気分転換」と言ってもいいのですが、字の通り「好転換」と言っておりますが、これを一人一人が意識しなければなりませんし、仕事に携わる全てのグループが意識しなければなりません。「好転換」を行わなければ、機械のことばかり考えて、指先と目先だけの人生になってしまいます。

図書館と研究所がなければ本当の研究はできませんから、どこの大学にも図書館と研究所があります。ここで一番大事なことは「沈黙」です。図書館は壁なき密室と呼ばれています。研究所では騒いではいけません。それから学校の教室というのは決められたテーマについて語り合うことはあっても、他の雑談はできません。してはならないのです。ですから考えてみますと、全体が一つのことに集中するような世界を、我々は文明の始まりから持ち続け、それは技術連関ができてからますます度を越してきています。エウトラペリアを通して、それを変えていかなければなりません。その場合、エウトラペリアを考えますと例えば、ある共同の仕事をするところには必ず、疲れた時に人間的な対話ができる場所が必要でしょう。そこへ行ってテレビジョンを見て疲れを癒そうということではなくて、顔と顔とが向き合って人間の言葉を語る場所を作るようにしなければならないということも、倫理的な社会的プランの一つになると思います。たぶんそれは公共哲学と私的哲学の中間にあって、世界的に真面目に考えていかなければならないと思います。

### 「責任」(responsibility)

エコエティカで考えなければならない問題として、さらに「責任」

(responsibility) があります。事後処理のときには accountability しかありません。accountability というのは、説明責任と言われますが、accountability の後に来る徳が何かあるはずなのです。事前の徳目、事後の徳目、これらはまだ十分にはできていません。これらについて私は今一生懸命考えているところです。

それから、倫理を考える者たちは、政治家たちに倫理意識を強めてもらうよう努力しなければならないでしょう。その手始めとしては、「国家公務員倫理法」などという、翻訳することの不可能な馬鹿語ウマシカを変えていかなければなりません。また、いろいろな省庁を増やすよりも、エコエティカからの切なる要求として「危機管理省」と「エネルギー省」を絶対に作るべきです。エネルギーは今、電気になっていますが、その電気を原子力で作るのが良いのかどうかや、太陽発電について政府が真面目に考えなければならないのではないのでしょうか。そういう意味でエコエティカは、広く世間に発言するために皆様の協力を必要としております。そのように申しますと、エコエティカは学問ではないとお考えになる方が出てくるといけませんので、エコエティカで初めて論じられた倫理学における論理構造の逆転ということについてお話ししたいと思います。

## 6. 論理構造の逆転

倫理学も学問ですから論理学が非常に大事になります。パスカルもすでに言っていたように、「人間は考える葦」であります。宇宙の中で、肉体的には人間が一番弱い存在かもしれないけれども、考えるという点にだけ人間の偉大さがある。だから倫理も考えることが大事です。

さて、従来の古典論理学において、どのような基本的構造があったかといいますと、行為の論理構造です。行為も三段論法で考えることができ、大前提、小前提、結論があります。この行為の論理構造の逆転については、ついこの間亡くなったフランスのリクールという哲学者の『現代の哲学』という書物の中で、この書物を、坂部恵先生と坂本賢三先生がお訳しになっていますが、その

中で、日本の哲学者の今道という人が発見した新しい論理の問題だと紹介されております。それを簡単に説明致します。

### アリストテレスの「行為の三段論法」

アリストテレスの時代の行為の論理構造は、大前提で目的を定立します。例えば「金銭が欲しい」という大前提があるとします。これは悪いことではありません。したがって「金銭を手に入れる」ということが目的になります。そのために手段を列挙していきます。それが小前提です。大前提の目的は、医者が病気を治したいというのと同じように、自明的に善なのです。金銭を手に入れるためにどうするかというと、手段を列挙しなければなりません。例えば両親がおらず、アルバイトしなければ生きていけない学生が、妹を病院につれていかなければならない、という差し迫った場面を考えてみましょう。その学生は妹のための入院費が欲しい。そのためには友達から借りる、あるいは自分の持ち物を売る、あるいは副業をする、預かっている部活の費用を失敬するなど、いろいろな手段を列挙することができます。アリストテレスは *rhaista kai kallista* である手段を選ぶようにと書いております。*rhaista* は「できる限り容易なもの」、*kallista* は「できるだけ立派なもの」という意味ですから、いろいろな手段の中から、できる限り容易でしかも立派なものを選ぶことになります。したがって今挙げたものの中では、もしできるのならば、自分の持っているものを売ることです。カメラや楽器を持っていたらそれを売りに行って、1万円でも2万円でも入手できれば、それで妹を病院に連れて行くことができるでしょう。しかし、盗むという選択肢もあるのです。これを拒否するのが倫理的意志です。

### 技術社会における「行為の三段論法」

これは今でも妥当する倫理なのですが、今、我々の技術世界で考えてみると、普通我々が気づかないような形の論理構造もあります。それはどんな倫理学書

にも出ていませんでした。だからこそリクルールをはじめ多くの学者たちは今道の発見と言って、彼らの書物に紹介してくれたのです。それはどういうものかと申しますと、大前提としてPという手段があります。電力、大資本、あるいは原子力というような大きな手段があり、しかも私一人が持っているのではなくて、我々が持っているのです。我々には電力があり、我々には資本があり、我々には原子力があります。これは自明的なことで、手段の確認です。そして、この手段からどのような目的が達成できるか、目的の列挙を始めます。今例えば大資本があるとします。大資本でどんなことができるでしょうか。本当の意味の学際的な研究所を作ろうと思えば、できるかもしれません。あるいは新しく歓楽街を作ることでもできるかもしれません。新しく新幹線を作ることでもできるでしょう。いろいろなことができます。そのときに、私一人が作るのではなくて、大資本を持っている会社なり国家なり企業なりが作るのですから、形としては委員会が目的を決定することになります。そのときに今の状況では、必ず経済効果が入ってきます。容易で立派なことというよりも、経済効果というものが、一つの選択の原理というのではなくて、ほぼ完全な独占的選択原理と言ってよろしいでしょう。

その際、委員会の責任はどうなるのでしょうか。先ほど言いましたように徳目としては、最初に挙げたアリストテレスの個人倫理では、責任は responsibility になるのですが、委員会の責任はいつも accountability になります。そしてその責任が委員会を構成する人々の身に及んでこないということが多くなります。団体の責任が個人の実存に及ぶのは民主的政体でない場合があります。例えば軍閥政府、あるいは一党独裁の国ということになれば、上層部に属する人々は、責任をとって全員死刑になるということもあります。そうではなく、委員会などに属する人々は、自分でどう責任をとるかを考えなければなりません。指導者の責任のとり方を、このような委員会に関わる指導的な人々は、世間的にもてはやされているのではなく、本格的に考えている倫理学者たちと研究すべきでしょう。

## 人間が人間らしく生きるために

それから我々の大事な問題として、分類の問題もあります。分類の問題とはどういうことかと申しますと、これは人間が生活をしていく上で、何が人間に近いかということを考えることです。今は馬や牛で農耕することが少なくなつてトラクターになり、また番犬を飼うことが少なくなっています。インターホンのような機械のほうが番犬よりも確実に誰かが訪ねてきたことが分かります。餌を与える手間もかかりません。あるいは駅に行きますと券売機が並んでいます。人間がいちいち窓口へ行かなくてよいのです。今や人間の労働を助けるものは機械になっています。だから「家畜」という人間の生活や労働を助ける動物が、だんだん要らなくなってくるでしょう。もちろんペットという形では残るでしょう。ですが、労働の世界の中で、人類に近いものは機械になってきています。機械が人間の労働を代行することになると、人間の言葉は労働のために必要なものではなくなります。これは大変な問題で、我々は半分、言語ではなくて記号で生きるような生活をしていることになります。これを意識して、人間が人間らしく生きるために何をしなければならないかということを手づから問うことも、広い意味でのエコエティカの問題なのです。

## 7. 結び

最後に伝えたいことは、我々は、平時はそれぞれ分かれて研究しておりますけれども、年に一度なり、三年に一度なりは、さまざまな研究者たちが集まって、真剣に大きな意味で倫理を論じ合う場所がなければならないと思います。私はそういう意味で、エコエティカへの皆様の協力をお願いしたいと存じます。また、今、世界の人々は、世界を戦場化する方向に向かいつつありますが、それをやめて、世界を美しくするように考えていかなければなりません。安倍首相(当時)の言う「美しい国」のような標語的なものではなく、真の意味において内面的に美しくする事が大事です。「美」という字は「羊」と「大」からできていますが、羊は中国では古来犠牲じゅうの獣です。犠牲が大きくなると美が輝

き出てきます。犠牲というのは自分を何かに捧げることです。しかし命をそんなに簡単に捧げる必要はなく、時間や労力を捧げればよいでしょうが、そのようにして世界を美しくしていくことを、私は「実践美学」と呼んでいます。この「実践美学」がエコエティカの一つの行動原理になるのではないかと思います。

ここでお話をさせていただくのは嬉しいのですが、50分に限られ、空間倫理から時間倫理への転換など大事なことを、これ以上申し上げることができませんので、不十分で残念でございますけれども、熱心にお聴きいただきましてありがとうございました。